

「問わず語り」

つい先だったの事です。

夜、あまりに静かな時間が過ぎていきましたもので、一瞬の戸惑いと数瞬のまどろみの後、窓の外に視線をやること暫し、わたしの手先指先にその冷たさを感じるよりも速やかに訪れたものは、毎年のことながら鬱とした感情でした。

今年は暖かい冬の筈だったのにもうこの方達は地上に降臨しましたわけで、わたしはその圧倒的な冷たい圧力になされるがまま、唯一の僥倖を明日の休日という暦の流れに身をたゆたうしかなかったのです。

ただ、これに伴う我が身の辛苦は耐え難きものがあり、早急に窓から離れ、後は忘れよとばかりに床に身を沈めたのです。

翌日の朝は遅く、わたしは日の昇るに任せて目を醒ますのです。

すると、寒い日はこうして晩秋と初冬のものとして去っていきます。

雪の保温が家屋を包む頃には、冬の日に東雲朝日の緑光と夕日の朱は訪れることなく、鈍色の空と地平と天空の入り交じった地平と水平の線にたまらない恐怖を感じるのですが、そのこのまま永久に続くかのような白い黄昏の日々のお話はまたの機会にいたしたいと思います。

では、本年もよろしく願いいたします。

Maki Rouel